

へなぶり

水辺あお

狂歌史などによれば、狂歌は近代になると衰退し、「へなぶり」と称して一時流行はしたが、そのまま消滅してしまつたとある。

「へなぶり」は一般に狂歌の一種とされ、流行語で新趣向を詠じたもので、一九〇四～五年（明治37～38）ごろに流行つた。「へなぶり」には、「へなちよこ」「へなへな」の「へな」に通ずる嘲笑のニュアンスがあり、「へなぶり」の動詞形である「へなぶる」には「あざける」「からかう」「軽蔑する」など近い。また「へなぶり」とは「ひなぶり」で、田舎歌の意味もあり、粗野な印象が残る。

この近代の「へなぶり」の源流は、木佐貫洋著「糸瓜考・正岡子規のへなぶり」（非売品）によれば、正岡子規の俳諧味のある「糸瓜」句にあるという。「糸瓜」句の最初は一八九一年（明治24）の「秋に形あらば糸瓜に似たるべし」で、秋を表現するのに野菊やすきではなく「糸瓜」のイメージを打ち出し、滑稽でありながらも、写真により物事に固執しない精神の柔軟性を求めたのだ。以後、子規

は「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」などの絶筆糸瓜三句まで「糸瓜」を五十句ほど詠んだ。子規の感化を受けた阪井久良岐は「へなぶり」を独自に発展させ、草創期の明星派の恋愛至上主義を揶揄する狂歌などを詠み、風俗詩としての川柳を育てた。

「へなぶり」を大衆化したのは、江戸期の南画家であつた田能村竹田の曾孫・田能村秋。皇だ。田能村は読売新聞記者などをつとめ、一九〇四年（明治37）に読売新聞の狂句欄を「新川柳」とし、機関誌「川柳とへなぶり」を発刊した。

なお昭和期に画家として活躍した曾宮一念は、盲目になつてのちに詠んだ自らの歌をあえて「へなぶり」と称した。曾宮の歌には雄大な自然詠も少なくなく、「へなぶり」としたのは、伝統ある短歌への敬意であつた。

一方、桑原武夫編訳の石川啄木『ローマ字日記』（岩波文庫）の一九〇九年（明治42）四月十一日には「予はこのごろ まじめに歌などを作る気になれないから、あい変わらずへなぶつてやった」とある。与謝野晶子ら十

三人と兼題での歌会だつた。このときに啄木が「へなぶつた」歌というのは九首あり、たとえば、

ククとなる 鳴り草いれし クツはけば、

カエルをふむに にて気味わるし。

君が目は 万年筆の しかけにや、

絶えず涙を 流していたもう。

などがある。確かに、啄木が「へなぶつた」歌は遊んでいて「へらへらした」感じだ。

もつとも山本健吉は『文芸読本 石川啄木』『詩人の変貌』で、この啄木の「へなぶり」の歌について「無内容なふざけ歌ながら……中略：啄木の茶目ぶりを読み取るべきだろう」「ふざけのめし、笑いのめしたおかしみの底から、人間存在それ自身の寂しさともいうべきものに突き当たると、啄木の「詩魂の働き」を評価する。

ところで、子規の諧謔や啄木の詩魂を継いだ「へなぶり」は、現代短歌にかなり溶け込んでいるようだ。高野公彦『水の自画像』に、
（こんやくの馬に心太の幽霊が乗つた）
みたいな日本酒の酔ひ

という歌があり、「心太の幽霊をこんやくに乗せる」は古い諺で「グニヤグニヤな状態」を意味する。「へなぶつてやったぜ」という作者の声が聞こえる。